

## 私の一冊

一般教育等 那須恵子 先生

多田富雄著 『寡黙なる巨人』

小鹿図書館 : 490.4/Ta 16 (集英社)

『私の一冊』として、一冊の本に的を絞ることはかなり困難な作業でした。その中で最近出会った本である、『寡黙なる巨人』をご紹介します。この本は著者に魅かれて選びました。

多田富雄氏のその他の著書には、『生命の木の下で』、『独酌余滴』などがあり、いずれも分野としては随筆に入ります。

多田富雄氏に初めて関心を持ったのはNHKのドキュメンタリー番組の画面でした。あえて画面と述べたのは、目の端に多田氏の講演の様子が飛び込んできたからです。車椅子に座り、言葉も定かでない一人の障害者がパソコンを打ちながら、多くの学者や学生(記憶が薄れていますが、多分そのような場面でした)を前に、免疫学の講義をしている画面に衝撃を受けて、思わず見ていました。硬直して無表情なその外見からは想像できない、柔軟で豊かな脳細胞の働きを逆らせていました。

多田富雄氏の略歴には、1934年生まれ、東京大学名誉教授、世界的免疫学者(1971年に免疫反応を抑制するサプレッサーT細胞を発見)、野口英世記念医学賞、朝日賞など受賞多数、趣味の域を超えた”能”では新作を発表とあり、2001年に脳梗塞で倒れる前は免疫学と創作能の分野でご活躍されていた方です。『生命の木の下で』の帯に、「私は著者の病後と病前の異なった生活に、精神の橋をかけるような本書の出現に、人間の不思議を見た。健康であることは、普通の人間にとって当たり前の状態であるのだが、重い病気にかかった人から回想すると、奇跡のように思えるようだ」加賀乙彦氏解説よりの添え書きがあります。『生命の木の下で』には著者が元気な頃の、アフリカやタイの海外での研究活動に伴う日常や、大学での日常などが伸びやかに描かれています。

多田氏が67歳の当時、突然発症した脳梗塞により、一夜にして重度障害に陥った様子と、その後絶望の淵から這い上がった1年間の記録が、『寡黙なる巨人』です。

脳梗塞による右側重度の片麻痺により嚥下障害と言語障害が起こった病気の様子、特に患者としての苦痛や思いをここまでの確に表現できるのは、それまで医療に携わってきた著者ならではのといえるでしょう。「あの日を境にしてすべてが変わってしまった。私の人生も、生きる目的も、喜びも、悲しみも、みんなその前とは違ってしまった。でも私は生きている。以前とは別

の世界に。半身不随になって、人の情けを受けながら、重い車椅子に体を任せて。言葉を失い、食べるのも水を飲むのもままならず、沈黙の世界にじっと眼を見開いて、生きている。それも、昔より生きていることに実感を持って、確かな手ごたえを持って生きているのだ。……これは絶望の淵から這い上がった私の約一年間の記録である。」に始まり、脳梗塞発作、臨死体験、回復過程のリハビリの様子など、私は教科書の知識として理解している範囲はほんの一部にすぎないことを痛感し、特に患者の心理、物言えぬ者の辛さに胸が苦しくなってくるようでした。しかし、著者の生きる力に圧倒されるような思いもしました。読んでいる時に頭の隅にタイトルの”寡黙なる巨人”がずっとひっかかっていた。巨人とは誰のことなのか。何をさせているのか。その答えは第一章の最後にありました。

第二章は“新しい人の目覚め”です。まさに「生きる」。回想も含めた著者の日常とはいっても、凡人のそれとは一味異なる批判的精神に富んだものです。

「…重度の障害を持ち、声も発せず、社会の中では最弱者となったおかげで、私は強い発言力を持つ巨人になったのだ。言葉はしゃべれないが、皮肉にも言葉の力を使って生きるのだ。…」健康の無駄遣いは戒められるような思いが残りました。

拙い紹介ですが、医療従事者を志す皆さんに是非読んでいただきたい一冊です。